

自然放射線被ばく研究ネットワークの構築

実施機関：独立行政法人放射線医学総合研究所（研究代表者：酒井 一夫）

実施期間：平成 21～23 年度

プロジェクトの概要

アジア主要国（中国・韓国・タイ・インド）において、自然放射線による被ばく線量を標準化された手法を用いて評価することを目的とし、被ばく評価手法の標準化、内部被ばく評価、外部被ばく評価、健康影響評価に関して、国内 4 機関が合同で研究を進めるとともに、上記 4 カ国の研究機関と共同で各国の現地調査を展開しようとするものである。中国、韓国、タイ、インドの 4 カ国との共同研究では、それぞれの国に特徴的なフィールドがあることから日本が培ってきた高度な測定技術等を実際に運用するが、それによって得られた成果は、世界中が注目する画期的な成果となり得る。とりわけトリウム系列核種の環境中における挙動や被ばくの実態を明らかにすることにより、新たな放射線防護基準の策定にも貢献できる。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

本プロジェクトにおいて、アジア 4 か国（中国・韓国・タイ・インド）の主要研究機関と緊密に連携し、我が国のリーダーシップの下に、共同で被ばく線量測定法の標準化を行い被ばく線量調査を実施したこと、加えて疫学調査も実施し得たことは評価できる。社会的に関心が高い分野の研究であることから、今後、結果の公表には十分留意しながら、さらなる成果の蓄積を期待する。

- ・**目標達成度**：アジア 4 か国の主要研究機関と共に、放射線医学総合研究所が有するラドン・トロンチャンバーを用いて測定の品質保証を図った上で、被ばく線量の測定法を標準化したこと、さらに各国での被ばく状況調査及び疫学調査を実施したことは評価できる。
- ・**成果**：研究計画について綿密な打ち合わせを行った上で、緊密な連携の下に共同研究を実施しており、国際連携ネットワークが確立されていると評価できる。当該地域海外機関との共同で実施された、標準化された被ばく線量測定法による現地調査の意義は大きい。また、自然放射線の人体への影響についても研究が開始できたことは評価できる。さらに、本プロジェクトで用いられたトロン測定手法が ISO 規格案として審議され、国際標準化への目途が得られた点も評価できる。
- ・**計画・手法の妥当性**：4 カ国の協力にて、広範な地域において自然放射線被ばく線量調査が実施されるなど国際連携による調査実施基盤が得られたことは実施計画・手法が妥当であ

ったものと評価できる。構築された調査実施基盤をもとに、今後の発展的な展開を期待する。

・**実施期間終了後における取組の継続性・発展性**：本プロジェクトにより確立された連携ネットワークによる共同研究が、継続展開されていることは評価できる。さらに、リードする放射線医学総合研究所においても、本共同研究プロジェクトを継続的に実施する態勢にあることも評価できる。原子力発電所事故による人工放射能問題に関連して、本プロジェクトの成果は日本においても重要性を増していることから、今後の発展的な展開を期待する。